

# 第2回文芸思潮新人賞発表

文芸思潮新人賞

第二回文芸思潮新人賞に、鋭意御応募くださいまして、まことにありがとうございます。心からお礼申し上げます。今回は前回より増え四一篇の応募数でしたが、残念ながら、優秀賞以上の作品は選出されませんでした。しかし、発想の先鋭さ、新しい着眼や感性に富んだ作品がいくつも見られ、新人らしいニューワールドを開示してくれました。九月末に予選選考を経た作品の中から、大高雅博・八寛正大・小浜清志・五十嵐勉の選考委員による厳正な審査の結果、以下の通り受賞作が決定いたしましたので、ここに発表させていただきます。

誌面の都合により、今号は奨励賞作品一篇だけに掲載を絞らせていただき、また次号以降に順次掲載の予定です。

また授賞式・祝賀会は、申し訳ございませんが、今年もコロナウイルスの影響が尾を引いた関係から見送らせていただきます。賞状・賞品などは後日直接御本人宛てに送らせていただきますので、よろしく御了承ください。

なお文芸思潮新人賞は明年も枚数、縮切、審査料などすべて同じ要領にて募集させていただきます。どうぞまた奮って御応募ください。心からお待ちして申し上げます。

## 最優秀賞

該当作なし

## 優秀賞

該当作なし

## 奨励賞

### 「順風満帆」

Shomin Shinkai (三重県津市)

### 「飛来する者たち」

山科晃 (東京都調布市)

### 「時間ドロボウ」

武者落国太 (香川県高松市)

## 佳作

「ンバ・ピティ」

中山喬章

「傘は森を紡ぐ」

森久上水

「夜眠夢」

眠夢イ夜

「オブジェクション」

幸村 燕

## 入選

「病んだ目」

山田葉里

「アンチセクシャル・ユートピア」

保泉花衣

「弾き継ぎ」

熾野 優

「最後の原稿」

神楽 鋼

# 選評

## 多彩な作品が集まったが

### 大高雅博



今回は、サスペンス、SF、前衛的なものと、多彩な作品が集まったが、昨年の新人賞の印象が強く、少し、割を食ったかもしれない。奨励賞の山科晃一氏「飛来する者たち」は、OLと鳥のマネをするアーティストである配達員が出会う事から始まり、鳥の観察を通して仲良くなるという言葉のようなラブストーリーである。新しいのかもしれない、面白いのかもしれないというのが、正直なところで、断定できないのが、弱点だと思う。

奨励賞の武者落国太氏の「時間ドロボウ」は、SFであり、発想は面白い。「時間ドロボウ」といえば、ミハエル・エンデの「モモ」を思い出す。ここでは、スマホの内蔵化など、現代的な題材を取り扱っている。SFでは、先人達が色々なことを考えていて新味を出すのは難しいかもしれないが、

れないが、最近でも、劉慈欣の「三体」のような驚くべき作品が生まれている。頑張って欲しい。

奨励賞の Shomin Shinkai 氏の「順風満帆」は、外側の悪事と、幸福な家庭を行き来する男の話だ。それは「ジキルとハイド氏」を想起させる。ただ、「ジキルとハイド氏」は善と悪の二重人格者であるが、この作品では違う。同じ人格である。新しいのかもしれないし、先祖返りしているのかもしれない。力は感じられるのだが、こういう作品は男が破綻するのが前提で作品には現れなくてもそれは意識した方が良くと思う。

中山喬章氏「ンバ・ピティ」は小さな善意の悪戯が取り返しも付かない事件になってしまふというもので、よくできていると思う。ただ、前年度の作品が衝撃的で、平板の印象は否めない。何か、自分のフィールドで作品を作られた方がよいのかもしれない。

小説を書くためにはとにかく、小説を読むことである。図書館に行けば小説はいくらでもあるだろうし、昔、早川書房から、世界SF全集が出されており、ハインラインや、ヴォクト、レムなど新しい刺激を受けたことを覚えている。良い小説や、本は、新しい小説や本と繋がっていく事が多く、それらが、必ず役に立つと思う。

それぞれの遣り方で頑張っていたらいいと思う。

## はつきり言って低迷

### 八覚正大



前年度第一回の驚くべき傑作三作の輝きに比して、今回ははつきり言って低迷していたと言わざるを得ない。全体を通して言えば、作者の内的独白では、作品としてのメッセージ性が弱く、また奇を衒った文体やストーリーのひねくり回しでは、独善的空想の世界を出られずリアリティが感じられない。次回を期待したいというのが本音であった。

「飛来する者たち」

何かえらく饒舌な宅配の配達員と、それを受け取る女性。そして肉体関係もできている感も。その二人が、中西悟堂（詩人、野鳥の研究者）、野川（武蔵野、小金井）国分寺…などを流れる川）という、けっこう具体的な人物引用と場で、野鳥の観察撮影をしつつ、双方のモノロギ的なものが流れていく。良い表現もあるにはある。〈入水するまで野鳥になりきって私の気を引こうとする彼の比類な

き暴力性に慄いた〉〈私は自意識過剰であったことに自分への信頼を失った〉〈悟堂は、その、そもそも籠の中の鳥を野で観察しよう言い始めた人で、…寛容すぎる自然観に理解できない魅力があるっていうか…〉〈…あれだけ長々とこの場に寄生する植物のように話していたのにまるでタンポポの種のように軽く去って行くこととする彼の後ろ姿を思わず何の理由もなく呼び止めてしまった。何かある…〉など。ただ、イメージとしての印象は希薄な感否めない。

「順風満帆」

〈スマホを開けば一瞬で世界の賑わいを感じることができると〉〈幸せ自体が冷たいのだと分かった〉〈その刹那の一瞬で得た火だけを頼りに、何週間かは透明な極寒の中でも生きていける確信がある〉——という小説舞台の現状認識は否定しないが、だからといって「冷血的」無差別な殺人を行うリアリティは観念以外には何も感じられなかった。

「時間ドロボウ」

物理の学者なら、もう少し時間論を哲学的にも幾つかの角度から考察するくらいの認識が欲しかった。何より〈私の一生をかけても宇宙の真理の一万分の一も明らかにはできない〉とある。太陽系は45億年くらいとしても、そもそも無限の時空の宇宙を扱うにあたり、一万分の一という、

## 優秀作もなし

## 五十嵐 勉

些少卑近な数量で例える所にリアリティはない。「ンバ・ビティ」  
 ん？ どんなミステリーなのか……と読んで行ったが、あまりに微細なストーリーをくねらせている感があり、読後感に残らなかった。

「傘は森を紡ぐ」

少年が、なぜか森で傘を作る老人に出逢う……それは一篇のファンタジーなのだが、そして文章も悪くはなかったが、それを超えるインパクトはなかった。

「オブジェクション」

学生が主人公の単なる独白。九鬼周造が出てきた時は、一瞬どう展開するのと思ったが。

「最後の原稿」

若い女性編集者とミステリー作家の関りと怨念。途中までは期待したが、ひねくり回し過ぎて、首が取れてしまった彫刻作品のよう。



第二回の新人賞は数の上では第一回の倍近い応募数があったが、残念ながら最優秀賞該当作は出なかった。やはり数は質を保証しない。昨年があまりにより、作品が三つも集まったために、今年トップが外れてしまった結果はいたしかたないことかもしれない。応募という集まり方の偶然性を示すものだろう。

そうは言っても、様々な才能を示す書き手に出会えたのは、新鮮だった。発想のフレッシュさ、捉え方や、世界観の新しさは、やはり新人ならではの新しい世界を示している。

私としては、できれば優秀賞は出したかったので、その中の一つはと三作を推したが、他の選考委員が厳しく、どうしても昨年の最優秀賞と比べてしまったため、同意が得られなかった。次回に期待したい。

Shomin Shinkai氏の「順風満帆」は日常の幸福な生活に恵まれている会社員の、心理の裏面を拡大して見せた問題作である。経済的にも、会社の地位も、妻も子供も家庭も、すべてハッピーに恵まれている日々でありながら、その心の底に潜むすべてを破壊してしまいたい衝動を暴力として爆発させる裏面の二面性をよく書き表している。「ジキルとハイド」の世界をもっと先鋭に現代の不条理として描いたその視線は評価したい。ルーティーンワークの繰り返し返される日常は、確かに現代の幸福の姿である。そのすべて決められた規則と平穩の枠の中に野性的なパワーが押し込められる現代の本質的な矛盾をよく突いている。平凡な幸福の表側の世界に、確かに刃を突き付けている。それは評価するのだが、その裏と表の接点が空白になっているところに、読者はリアリティの欠如を感じる。この接点をどう処理し、どう構築していくかが大きな課題になることは否定できない。この接点の獲得によって、Shomin Shinkai氏の文学世界は巨大になるかどうかが決まると言ってもいい。幻想として処理するのか、警察に手錠をかけられ、いっさいの幸福的日常を失うのか、不条理として交わらないまま深めていくのか、この世界に対する態度が、Shomin Shinkai氏の抗議の質を決定するだろう。一九歳という若さでのこの反抗を含んだ才能に期待したい。

山科晃一氏の「飛来する者たち」は、アーティストとして生きる人間の内面の葛藤の渦を、方言を混じえた流れる言葉で表象させた作品で、文章の彫琢性は応募作の中で抜きん出ている。最も小説の文体として高い域に届いている。それは注目したが、その高度な文章力で何を表現するかと言う段になったとき、外へ向かっての造形になっていない恨みが残る。このグタグタとした芸術創造を生む状態での混沌は、それだけでは形にならないし、何物をも形作らない。読者はそれに苛立つ。文章はいい。高い技術はわかった。しかしそれで何を言おうとしているのか、形や姿を見せてほしい。そこに課題がある。

造形が最もうまくいっているのは、武者落国太氏の「時間ドロボウ」だろう。これは最先端の科学の領域を扱っていて、量子力学と時間の問題にまで踏み込んでいる。SF小説でもある。幼年の頃と成人、社会人になってからの時間の経ち方の違いから、この時間の本質を科学の技術によって解析し、たくさんの人のゲームに熱中するその時間から一部の時間を搾取して、物理的に奪っていく天才起業家の最期をストーリーとしているが、発想がユニークでおもしろく、確かに一つの未来の可能性を含んでいる。スマホやパソコンのゲーム世界に熱中する未来人の生き方は、それだけでも鋭い批評にもなっており、さらにその奥で時間

を物理的に奪えるという発想は、哲学と力学の融合の可能性も含んでいて、進化の果てを見通している。鋭い着想に感心した。ただ、恐ろしい未来ではある。

中山喬章氏は焼け死んだ夫の原因を解明する推理小説仕立ての作品で、第一回に続けて読ませる力量は十分だが、子供が持っていた人形がインドネシアである必然性は乏しく、氏の持ち味であるアジアの領域との根が希薄になっている分、ありきたりの推理ストーリーになってしまった。結局殺す気はなかったのに、いろいろな偶然が重なって夫は焼け死ぬ結果となった。その解明への流れは牽引力があるものの、一人の死を見つめる眼に、あまりに突き放した疎遠さがあるのも気になった。離婚しかけていたとはいえ、夫の死を悲しまない妻、父親の死を悲しまない子供の姿に違和感がある。普通のリアリズムとしては、定着性が乏しい。やはり筆者はアジアに根差した作品を心がける方が、有利に感じる。次回ががんばってほしい。

佳作「傘は森を紡ぐ」（森久上水）は、森に傘が無数にあるという発想はいいが、傘によって何か事件が起こらなると、着想倒れで終わる。傘の群れが何かを象徴し、現実を変えていくモーメントが欲しい。

「最後の原稿」（神楽鋼）は、ある有名作家の担当編集者を主体にして書いていて、読ませるものの、前半と後半が

## 物足りなさ

### 小浜清志



昨年と比べてみると今年は少し物足りなさを感じてしまった。書きあげるのが精一杯で推敲にまでは時間を配れなかったという作品が多かった。

私が最も高い点を与えた「ン

バ・ピティ」は導入部のエピソードは不要ではないだろうか。プチ復讐というささいなイタズラが始まるのかと思いきや、夫が火災の犠牲になるという重い展開になっていく。自殺という見方もあったが、事故死という結末に至るまでいくつかの仕掛けが配置されていて作者の思索の重みが見えた。しかし、作品として物足りないのはなぜだろうと考えたとき、まず最初に浮かんだのは作者の作品にかけた熱量が少ないことに気づいた。

「傘は森を紡ぐ」独自の世界を作ろうとしている努力は認めるし、年齢の割に筆力も達者であるが、読み手を置いてきぼりにしているのが最大の瑕瑾であろう。SFでもミス

あまりに逆転しすぎていて、ストーリーに無理がある。筆力はあるので、題材の選択とストーリーを練る力を育ててほしい。

幸村燕氏の「オブジェクション」は「前衛」を標榜する挑戦意欲の漲った作品で、常識を次々に打ち破っていくその破壊こそが流れになっていることは魅力的であり、パワーを感じるが、中に詩が入ってきたり、順序を意図的に入れ替えたりするのは、やり過ぎで、その意図を理解するのに骨が折れる。創造とオリジナリティが、そのわかりにくさのために独善に陥りやすくなる危険を考慮する必要があるだろう。どこまでわからせるか、どこまで理解可能な範囲を広げるか、そのための技巧は何かが必要か、これからの課題であろう。それは前衛の宿命であるし、負わなければならないもので、これからの自身の世界観の深まりとともに、身につけなければならぬ文学表現の武器でもあるだろう。このような横並びで競われるコンテストにおいては、特にその方法のわかりやすさが問われるだけに、意識し、注意しなければならぬ条件ではある。

まだまだ新人にはもっと大きな潜在力があり、途方もないものが眠っているという確信がある。また次回新しい創造力に触れる機会を楽しみにしている。

テリーでも読者の納得と共感がなければ作品はゆがんだままである。

「最後の原稿」小説家と編集者の恋愛なのかと読み進めていると、話が大胆に展開していく。しかもその広がり方が大げさすぎてリアリティがまったくなくなってしまう。

「飛来する者たち」観念的すぎるこのような小説は書き手の自己満足だけがしみだしてしまう。観念そのものも深まりを見せるのではなく、浅瀬を浮遊する漂流物のようなのである。もっと自分自身と対峙していれば、まったく違った作品になっていたであろう。

